秋山清

秋山（あきやま）　清（きよし）　一九〇四年福岡県企救郡松ヶ江村字今津（現北九州市門司区字今津）に生まれ、小倉中学を経て日本大学を中退。一九二四年斎藤峻らと詩誌『詩戦行』をはじめ、アナキズム的傾向を示す。一九二八年に『単騎』『矛盾』同人、つづいて『黒色戦線』に加わり、一九三〇年小野十三郎に協力して『弾道』を発行する。一九三一年飯田豊二、八木秋子らと解放劇場を興し、一九三三年丹沢明、植村諦、岡本潤らと初めて全国的規模のアナキスト文化団体「解放連盟」の結成にかかわる。

太平洋戦争の下では詩作を殆んど発表せず、戦後一九四六年に金子光晴、岡本、小野と『コスモス』をはじめ、日本アナキスト連盟の創立に参加。一九五九年に第一詩集『象のはなし』以後『ある孤独』『白い花』『豚と鶏』『秋山清詩集』を出し、また中野重治と『無名詩集・祖国の砂』を編集した。他に『文学の自己批判』『戦後詩の私的な回想』『あるアナキズムの系譜』がある。

海峡

鞭うち鞭うって自らを叱咤する
安逸に流れようとする自らを叱咤する
空間にかなしみがみちわたる
心にさびしさがある
外気が冷え冷えと血潮にふれる
木の葉と木の葉との間を
風がすきまをつくって流れる秋
秋——
夕暮であった
灰色の靄のおりた海峡である
まるくはらんだ海峡の水が白い
港に浅い灯が見える

岩のうえにだまっている
かなしみと
あきらめと
妥協と
——流浪をおもう秋
青春を絶望に食われようとした
夕闇がしだいに濃度を増す
満々とはらんだ海峡が傾いてくる
海峡が矢のような奔流となる
叫ぶ
飛ぶ
よどむ——渦まく。
夕闇が濃くふかい底を
ひと筋つっぱしってゆく水勢
うずまく奔流はおれを魅した
おれは必死に自分をそだてた

—都会のほこりにまみれている
—飢えている
—駈けている
—泥靴をふみつけている
闇から明るみに抜けようとする
太陽の前に己を鍛えろ
大空の前に呼吸しろ
海峡の潮のように
われらはひとすじにつっぱしる
自分をかたむけて流れこむ
倦怠に鞭うち叱咤して
太陽の前に躍り出よう
奔流——
しろい流れとなって
海峡がさわやかにかたむく秋である

クロンスタットの敗北

凍結したバルチック海のそらに
冬はこの日めずらしく太陽の笑みをかくさなかった。
一九二一年三月一八日。
今日はパリ・コムミュンの日。
パリ市民が権力とたたかって獲得した自由と自治の記念日。
けれども北のクロンスタットに自由の旗は折れた。
昨日までの抵抗と戦闘はやみ
堡塁は破壊され、水兵と市民の姿がない。
昨日は堡塁によって彼等はさいごの抵抗をつづけた。
革命を守り
自由のために

敗北をおそれず起ち上がったクロンスタット。
彼等は鎮圧された。
要塞クロンスタットの兵舎は
政府・赤軍の兵が充満している。

攻撃は三月七日夜半。
バルチック海を挾んで対岸から火蓋を切った。
包囲攻撃を受けつつクロンスタットの市民は婦人労働祭をわすれなかった。
—われわれは労働者の正当な動機に立ってたたかう。
—敗れてはクロンスタットの廃墟にたおれましょう。
—立て、祖国ロシアの婦人と労働者！
三月八日の挨拶は電波にのってロシアと全世界に散った。
婦人労働祭の行進のまんなかに赤軍の第一弾は炸裂した。

波の凹凸の形のままに
凍結したバルチック海の氷原を
白装して赤軍が渡る。
クロンスタット要塞は外海にむかって首都ペトログラードの守り。
その無防備の東と南から、氷結した海の上を赤軍が渡る。
間断ない砲撃のなかにクロンスタットはボルシェヴィキ幹部に反省
を要求しつづけた。
—われわれは光栄ある十一月革命の先駆者だ。
—われわれは諸君が権力とともに民衆の自由の要求に叛くを悲し
む。
—反省せよ！　赤軍首脳部、ジノビエフ、トロツキー。
—われわれは、われわれが捕虜としたクロンスタット在住のボルシ
エヴィキを殺さない。市民の憤激から守っている。
最後まで。

砲撃はやまぬ。砲撃はつづく。
夜に入っていよいよすさまじく。
飛行隊出動の報に、クロンスタットの血は逆流した。
市民も立ってともに銃をとった。
—巨砲の威力にたのむ人民の敵とたたかえ。党独裁反対。

その叫びは北の吹雪の風にとざされる。
クロンスタットの叫びはたくみな赤軍の逆宣伝に潰えた。
はりつけられた反革命の汚名。
おお、凍結の彼方バルチック海の孤島。
厳寒よ。欠乏よ。耐えぬかれた飢餓。敗北の五十幾日よ。
生きのこった市民と水兵は
旗艦ペトロポウロスクに逃がれ
いまは敵の手におちた要塞に最後の砲火をおくった。
クロンスタットの市街は

とらえたボルシェヴィキを一人も殺さなかった人々の血にいろどられた。

電波は自由を信ずる者のさけびをのせて、最後の時も全世界にひろがった。

―労働者農民諸君！　われらの同志よ！

クロンスタットは敗北した。

われわれはなお叫ぶ。

勝ちほこった者が革命の敵であることを。

彼等は民衆をふみにじった。

独裁と権力は自由を扼殺した。

世界のはたらく者、

われらが友よ！

一九二一年三月一八日

夜はチェカが無数の銃殺をあえてして、

クロンスタットの反逆は血潮のなかに鎮圧された。

反革命の名に死んだ自由と解放の友よ。

その敗北よ。

わがクロンスタット。

拍手

――ニュース第一七三号

空母ホーネットの甲板に
対空砲とどろき。
曳光弾飛ぶ彼方
海面すれすれに
雷撃機が殺到する。
弾幕の
炸裂を
間髪に制し
決死の生命が
機を操縦してせまる。
私の目は

その瞬刻をみつめた。
突如館内はそうぜんたる賞讃の拍手に湧いた。
私は目をとじた

注　ニュース第一七三号は空母ホーネットの艦上から米軍が写したもの、同艦の拿捕により、ニュース映画として上映された。

白い花

アッツの酷寒は
私らの想像のむこうにある。
アッツの悪天候は
私らの想像のさらにむこうにある。
ツンドラに
みじかい春がきて
草が萌え
ヒメエゾコザクラの花がさき
その五弁の白に見入って
妻と子や
故郷の思いを
君はひそめていた。

やがて十倍の敵に突入し
兵として
心のこりなくたたかいつくしたと
私はかたくそう思う。
君の名を誰もしらない。
私は十一月になって君のことを知った。
君の区民葬の日であった。

おやしらず

夜がしらしらに明けると
ここは越後の国おやしらず。
汽車は海にせまる山壁に息はきかけて走り
人のいない崖下の海岸に
しろい波がくだけている。
あとからあとからとよせてきて
くだけている。
なんというさびしげな名前だろう、
「親しらず」とは。
がらす窓に
ちいさな雨となってふる霧は
日本海のそらと海とをおおい
茫として沖がみえぬ。

春

一匹のちいさな甲虫が
風にふかれてきて
袖にしがみついた。
触角をふり
羽をふるわせて
ぶんと飛んでいった。
黒い一点が空にすわれた。

南海派遣洋九六〇七部隊は
ニューギニアからかえった。
病みたおれて
起き上らぬ

三十六人。
そのなかに
君はいなかった。

片かげりのはやい
北斜面の山の疎開地で
おっかさんは
晴れわたった空をみた。
虚空無辺の果までつづいていても
かえってこぬ。
かえらぬ百万人とともに。

象のはなし

象のいない上野動物園に
タイ国からこどもの象がきた。
まだ鼻もよくのびていない可愛いいやつ。
インドからも大きな象がきた。
ちいさい象はハナコさん。
大きな象はインディラさんと名をつけて
朝早く子供がわいわい押しかける。
大人も毎日見物にくる。
総理大臣もやってきて
一本百円もするバナナをたくさんたべさせた。
象たちは
うまいうまいとながい鼻の下にのみこんだ。

なぜ象たちはこんなに歓迎されたか。
動物園に象がいなかったからだ。
動物園に象がいなかったのは
戦争で殺されたからだ。
戦争は檻のなかのおとなしい象もころしてしまう。
目のやさしいアジアの象よ。
象のすきな子供たちよ。
それはそんなに古いはなしではない。
おとなしい象はどうして殺されたか。
厚くてつよい象の皮は
鉄砲の弾もはじきかえす。
注射の針もとおらない。
たべものに毒をまぜると
感のいい鼻でかぎわけてしまう。

だから水ものませず
ひぼしにされた。
もう三週間も、もっと
象たちはなんにもたべない。
腹ぺこぺこでたおれてしまいそう。
子供たちもだあれも来ない。
園丁のおじさん達はこっちを見ないふりしている。
あの親切なおじさんたちが。
なぜだろう。
象の目から涙がながれた。
芋がほしい。芋がほしい。何かください。
三十日ちかくたって
生きのこっているのは
やせてしわだらけのトンキーさん一匹。
ああ、遠くにおじさんがみえる。

逆立ちの芸当をして
もう一度ねだってみよう。
やっとのおもいで後足を蹴あげたはずみに
前足からくたくたとくずれた。
そのまま立ちあがれず
象は死んでいた。
人間の食糧も不足のときに
象のたべものなどありはしない。
空襲で
力のつよい象があばれだしたらどうするか。
こうして、戦争はむりやりに象をころした。
動物園の象のはなしだのに
戦争のことなどはなしてしまった。
そんなこと、象たちや子供はしらぬがいい。

大きな象が腹べちゃんこにやせ
しわだらけになって死ぬようなことは
もういやだ。

背なかにはない

背なかには目がないから。
どうして私はうしろからついてくる人たちのことをしってるだろう。
どうしてうしろからついてくる人たちの
舌をだしたり指さししたりする
いじけて人のわるい狐っつらをしってるのだろう。
背なかには目がないから。
私はそれがみえないのに。

いつも
人のうしろからついていって
べろりと赤い舌をだした。
気どられぬように、げんこつで小づくまねをした。

私は、私のことをおもいだしているのだ。
うしろからやってきて、ねたみそねみの悪意をこめて
いつまでもくっついてくる人たちの
知恵の足りん、だからいっそう狡猾な表情。

でかいものには上目づかいでよっかかる。
つよいものには尻っぽをまく。
ものほしげなほいとの身勝手、われとおのれの身のかわいさばっかりだ。
おたがいがおたがいのうしろからついてまわって
べちゃくちゃさえずるのも。
あわてふためいて人をおしのけるのも。
あごをつきだし　一足でも　一寸でも。おれが前。おれが先。
自分だけが最後列にいるみたい。
背なかには目がないから。

うしろからついてくるやつも背なかには目がない。
そのうしろからくるやつも。そのうしろからくるやつも。
前の方ばっかりにらんでいる。
前ばっかり。前ばっかり。
みんなおんなじ方角にむいて、
鼻っ先ばかりみて、押され押されてあるいている。

しってるのは自分のすぐ前をあるいているもののことだけ。
うしろの方で
押しあって　もみあって　目をまわして　下敷きになって。
ふまれて　つぶれて　死んだって。
ありったけの声が
どなろうと
がなろうと。

二重橋の鉄のらんかんに
押しつけられて　ひしゃげようと
ぎゃーっとさけびあげるその声が中途できえようと。
背なかには目がないのだ。

大石原

とおくひいていった
干潮のあとの石原の
ごろごろ石の無言のつら。

はなしあうこともせぬ。
自分だけ物たりている無表情。
日の当っている方はしろく。
かげっている方はくらく。

むきあってながら
そっぽをむいて乾いている。
だまってごろごろしているのが

ただ一つ安全な処方みたいに。

大石原を風が渡る。
磯くさく夏のまひるの風。
大声をたてるなよ。
大声をたてても返事はないぞ。

ぬれて、かわいて
まるっこく角がとれて
千年万年このままだ。

——ある孤独

やぶれ鳥

とんでいるのはやぶれ鳥。
能率がわるくささくれた翼を
羽ばたきもあたふた。
ビルとビルとのあい間を夕ぐれどきの一匹だ。
人間なみに尾羽うち枯らし
よろめく姿をどこへ飛ぶ。

ばさばさばさばさと不景気な
やぶれ鳥の羽ばたきで
おれたち生きてゆくつもりはない。
友だちのおまえを連想し
歩く自分のうしろ姿を思い出したぞ。

やぶれ鳥め。
見せつけてやがる。
黒い羽、黒い翼、脂肪っ気がぬけて
こそけて、ささらだって
くたぶれはてて
支離滅裂、都会のそらをとぶ。
みっともないなんていえた義理か。
夕ぐれというものの虚空寂寞、秋はさびしいものだからよ。
おまえのたよりなげな腰のふり。
お先まっ暗な手つき足どり。つかい古した翼が裂けて、風がもれる。
身のほどわすれた大言壮語。
そいつを笑いとばしてやるやつもいないんだ。
誰か、おだててでもやったら
おまえのひとりぼっちに張りが出る。
羽音もばさりばさりと

手もとどきそうな低空で
やぶれ鳥はどこへゆく。
ばかにするなよ。
おれの坐骨神経痛がつっぱしる。
ささくれだった風切羽で
スピードなんて、くそっくらえだ。
かったるくとどこおった排気ガスのなかを右往し左往して
年一年とすきまだらけの
東京の森の茂みにたどりつけばもう夜だ。
ごめんだよ。
同情なんておれの方からくれてやる。
見たか。なまり色のシードラゴン。
テレビをはみ出た浦賀水道の波しぶき。
見てきたことを話せというんだ。

東京のうちとそと。
夜昼のくぎりもなく、機銃生産、大小の弾丸づくり、靴づくり、バリケード用の麻袋まで。
うらぶれた羽音など聞きすまして
一篇の詩を書こうなんて。破れ鳥よ。

朝にかけての団欒

わが少女たちはまだ眠ろうとはいわない。
ねむらぬあせりと困惑と
思いは気みじかに回転し
どこまでいったらメドがつくか
異見を述べれば述べるほど
事のふかさを拡大しながら
性とその解放
男からの独立
女の生きる自由について
まだ歩いたこともないエゴイズムを手さぐりして
疲労をふり払い振りはらい
おしゃべり熊のように声をはずませ

卓上には紙巻莨の吹殻を盛上げ
いつか山の窓は明るくなり
朝だ、朝だ、
と樹々のすがたが見えはじめ
冷えが襲ってきて
わが論客たちはクシャミを増し
意見は滅裂に多弁化し、到達のはてないもどかしさに
疲れたでしょう、
おやすみ、
そういってそれぞれのベッドへゆくきっかけさえ
もう、とっくにうしなわれて
とめどなく拡散しつくす話題は
時間を今日の三倍に
参加者を倍加したとて
結論近くにさえ辿りつきようもなく

とっくにあきらめていながら
鈍った話題をまきかえし、また繰りかえし
掻き立て、積み立て
結婚とは
なぜ、誰もそうしなければならんのか
その合法とその習慣の圧力へ言葉の挑戦はたやすいが
ああ、家というものがある、親きょうだいがある、先祖がある、日
本国家がある
民族があり、世の中があり
愛もあり、あきらめもあり
（もっと、それよりも）
経済と生活の現実があり
私自身があり、私個人があり
その生きている自己（おのれ）の欲望の時間がどんどん減り
わが生命（いのち）ひとりのための営みごとを忘却して

その犠牲の大きさだけ賞讃の増す世間を
憎みとおせるか
軽蔑しきれようか
目のまわりにくらく隈ができるほどくたぶれ
論議は終末にいって果てず
女は自分だけの子を孕み
親となり母となりして
自在に生きて　そして死にゆくことを
願わんとするのであり
えんえんと未来永劫人間（ホモサピエンス）の血を受け継ぎ渡すという事大意識に押
しつぶされないために
死の時間の制限の外にまで
一対に固定化すべきではなく
遍路はるばるわが人生の行きはてるどこかで成長したわが子の
不特定多数の父親と

交歓する日を持つべしという
その念ずる願望の可憐さよ。
やっぱり抒情詩が好きなんだ。
一度っきりの生命を
むだにしてよいものか。
涙っぽくはなけれどもセンチメンタル。
恋愛なんていい草の古さこそ哀切、そのような思いの
霧散しはてた一九七〇年代の
時々刻々、そのひとり立つ不安が自由というものです。
亢奮も落胆も、未知も、責任も、つかの間のみんな吾がもの。
子どもを女だけが孕むことの
あの辛棒づよさを
女はわが生理に向けて誇るべし。
いやまたそれを拒否すべし。
ああ、とんだあわてんぼの、それは物差の短い結論。

論議のかまびすしさよりもずっとずっとやさしい少女らと
秋の夜長を徹するには
頃あいのまことに話題であった。
悪しき妻といえどもなってみたく
犠牲すくなくのほほんと浸りたいくせに
男を対象として考える他ない女独立の意識の
うらさびしさに今日の乾盃を。
百千の論議のまま
朝が白く来てしまった。
感歎詞とともにぼくはこの部屋の隅っこで眠くなる。

——戯謔